

に捨てゝおいて歸りましたな、皆が寄るとあの時の話しが出来ますね、今日も吉野はんとあの話しをいたしましたのや』『貴女、吉野に逢ふか』『へ毎日逢ひますね』『ア、そうか、あれは一月やつたなア……一チニイ三ンと、四月から内え来て呉れてるのや』『だれが』『吉野が』『マアうそばつかり、吉野はんは未だ働たらいて居はります』『二代目の吉野か』『イエ大和巡りした、吉野はんが』『うそ、内え来て居るがな』『あんな事、今日も吉野はんと、旦那はんと私しと、三人連れで芝居見物に來ましたのや、一寸幕合に買物に出ましたのやがな』『エへ吉野が、芝居へ来て居る、それほんまか』『アノ妙な顔してなさる事、そないに疑ひなはるのやつたら、逢うてやつたら、分るやおまへんか』『オ、逢はして呉れるか』『しかし直接にはいきまへんね(親指出して)コレが怪氣深いよつて戸屋口から覗いて見たらわかるやおまへんか』『そんなら連れていて』『はア、よろしおます』『芝居へお這入り、こゝから覗いて御らん、それ向ふに居はりますやろ、髭の生へた紋附の羽織を着てはる人と』『ホンニ、あれは吉野や……』『それ見なはれ』『ホンマに吉野……動いて居る』『ソリヤ生きて居はりますもの』『いづれその内に行て話する、左様なら』『一寸若旦那お所は』と言ふて居る内に島三郎は内へ歸りますと、お客は満員『オイ巻二ぜんしてんか』『巻二ぜん』『ア、一寸待つて何や、玉子を絶つて居る、よいやないか、何にかんて、そんなら何を喰ふのや、きつね、もつさりして居るなア、巻いかなね、きつねと替へてんか』『巻が信田にかわつて』『やつぱり吉野に

違ひないがな』と其のまゝ側へつかくと、吉野のたぶさを掴んで前へ引寄せます。『コレく島三郎、お前なんちうことをするのや、吉野になんの罪があつて』『イーエお母さん、あんたは何も御存じおまへん、コレ、お前はどこの人ぢや、いへ、言はんと痛い目をせにやらんぞ』と五ツ六ツ手荒に打擲しました。『ハイ、申します〜』(此所「らいじよう」といふ鳴物が這入る)『頃は一昨年一月寒風はげしく降り積る、ゆききの人も絶えなくに、まんも拍子も足曳の、大和の國は奈良町の、片邊りなる野邊に住む、無官の狐、親子五疋が困難の折柄、あなた様の野施行、御身も寒さを耐へ兼ね、いつそこへと有丈けを、置いて賜はる有難さ、御恵みのあづきめし、油揚講共頂戴し、親子五疋が糊口を凌ぎ、この後は守護し奉つらんと、御行衛を尋ねぬれば、實父の元を追ひ出され、今は御流浪の御身と承り、假りに吉野の君の姿を借り、資本金を御用達しも、蓄生ながらも恩儀を忘れぬ、大和魂かく物語る上からは、吾れは古巢へ立歸らん、姿は忽ち是れ御覽……』『ア、……今のいまで、木原の遊女と思て居たが(落)吉野が信田にかわつて』

『吉野狐』に就て

此の噺は、初代林家正三門人、二代目林家菊丸師の作なり、明治廿年頃の作、心齋橋筋に澁谷や石原と言ふ時計屋が出來た時代、新派俳優川上音次郎氏が、未だ二世會呂利新左衛門の門人、浮世亭〇